

臨死体験

死後の世界はあるのか

Tsuka

臨死体験をした人たちが語る
「あの世」の世界観とは？
死は恐怖か快楽か・・・天国と地獄の存在

目次

1.臨死体験とは

2.体験者が語る①

3.150人による共通点

4.体験者が語る②

5.自殺者の体験

6.臨死体験を科学

7.まとめ

1. 臨死体験とは

一般的には「死に臨む体験」を言います。

具体的に表すなら、医学的にはほぼ絶望的な状態から、あるいは一度死亡が確認されてから、再び蘇生して生き返った人が、死んでいる間に「別の次元」で体験してきたことを言います。

世界中でこれらの体験が寄せられる中、共通した体験が見られます。

- ・ 幽体離脱（体から魂が抜ける）をし、上から自分が何をされているのかが見える
- ・ トンネルをくぐる
- ・ 先祖やすでに亡くなった人たちとの再会
- ・ 神々しい光に包まれる
- ・ あの世かこの世かの選択を迫られる
- ・ 経験したことのない安心感または、「愛」のようなものに包まれる
- ・ . . .

科学でも説明できない事象が臨死体験でもあるようです。

死後の世界について注目されたのは、1970年代に出版されたイモンド・ムーディー博士の『かいま見た死後の世界』は大きな反響を得ています。

死とは、誰にでも隣り合わせでありその日数は誰にも予想できません。

今回は、事故死、病死などから垣間見られる体験をまとめたいと思います。

2.体験者が語る①

脳神経外科の世界的権威、エベン・アレクサンダー医師によると、「死後の世界は存在する」として、

世界に大きな反響を呼びました。

なぜかといえば、もともとこの医師は死後の世界を否定していた人物だったのです。

父も脳神経外科の医師であったために、「科学で証明できないものは信じない」として、

育ちデューク大学を卒業後、大学病院で臨床医として数々の脳外科手術を手がけた。

その後、世界でトップクラスと言われる、ハーバード・メディカル・スクールの脳神経外科に在籍。

200本を超える論文を執筆し、研究者としてもその名は知れ渡った。

死後の世界の存在を知るきっかけとして、54歳の時に大きな病を抱えたことから始まる

細菌性髄膜炎という恐ろしい病気にかかり、昏睡状態に陥ったのです。

かつ致死率90%と言われる最も危険な状態であったとされています。

昏睡状態に陥り、家族が集まる中、医師から最後の伝達を受ける。

「12時間後までに回復の兆しが見えなければ、抗生剤の投与を打ち切りたいと思います。」

つまりこれは、「死」を意味する宣告です。

しかし、12時間が経とうとしたとき、本人の目が覚めたのです。

なおかつ、後遺症もなく回復されたとされています。

これは、世界的にも事例がない回復とされています。

エベン医師は退院後、自ら確かめるべく入院中の自身の脳を徹底的に調べ上げ、

あることに気づきます。

入院中の7日間に関して、脳の大部分は停止していたのです。

脳分野では、死後の世界を垣間見た人たちを、脳の錯覚として見えています。

しかし、停止している状態では説明がつかないとして、エベン医師は

自身の体験を基に死後の世界観について強く主張しています。

彼は何を見たのか・・・

エベン氏が語った経験談-----

そこには「闇」があるが、はっきりとした視界が利くところであり、遠くから得体の知れない生物？が吠え立ててくる。

しばらくすると、美しい光がみえたと思えば一瞬にして美しい世界に行き、その上を飛んでいた。

それと同時に、見知らぬ美しい女性が現れ、エベン氏に帰るように促した。

しばらくすると、大きな雲に着き、さらに進むと安心する暗闇があったそうです。

その後、3つの場所を行き来し、それ以上進めないとわかったエベン氏は降下し、病室で祈る5人の関係者を見ながら「帰らなければ」として蘇生したとされています。

ここで重要視すべき点は、「病室で祈る5人の姿」を見ていることです。脳の専門家はこれらを、レム睡眠の一種と説明するも、祈っている人たちを脳が停止した状態で見ると（感じる）事は不可能と主張しています。

また、別の情報では、亡き妹と再会していたともされています。顔も見たことがない人と再会し、蘇生後にそれを知ったと言われています。





3.150人による共通点

■臨死体験をした150人にある共通点

- 1、自分の死の宣告が聞こえる
- 2、これまで経験したことがないような穏やかで愉快的感覚に包まれる
- 3、不思議な声が聞こえる。中には美しいメロディーという人も
- 4、突然暗いトンネルの中に引っ張られる
- 5、魂が肉体から離脱し、外部から自分の身体を観察する
- 6、懸命に自らの苦境を他人に訴えるが、誰にも聞こえない
- 7、時間の感覚がなくなる
- 8、視覚や聴覚が非常に敏感になる
- 9、強烈な孤独感に襲われる
- 10、周囲に様々な“人”が現れる
- 11、「光の存在」と出会う
- 12、自分の一生が走馬灯のように映し出される
- 13、先に進むことを遮られる
- 14、蘇生する

これらの事が約30秒という時間で起こるといふ

また、多くの場合そこで出会う人々とのコミュニケーションは、言葉を発することなくテレパシーの状態であるといわれています。

当然ながら、これらに反論する人たちもいる。

神経生物学と人間の恐れについて研究している米コロンビア大の心理学者、[ディーン・モブス \(Dean Mobbs\)](#) 「超常現象的な要素はないと思う」と語る。

臨死体験とは「脳が通常通りに機能しなくなっている現れだ」とモブス氏は言う。

「わたしの考えでは、われわれの脳は特に混乱した状況や外傷を受けた状況に置かれると、鮮明な体験を作り出すことができる。周囲で起きていることを脳が解釈し直そうとするのだ」

しかし、体験者の多くの共通点はなぜ起こり得るのでしょうか。

そしてそれらは、死に限りなく近い状況下で垣間見るとされているから不思議です。

4.体験者が語る②

芸能界の人たちも臨死体験をした人たちがいます。

・ビートたけし

バイク事故で一時騒がれましたが、その際に本人は生死の境をさまよい、友人であった逸見政孝さんと再会し、メッセージを受け取ったと証言している。

・加藤茶

病気で死にかかったとき、気がつくや河原で石を積んでいる場所に来てしまった。ふと前を見ると、亡くなっただけかや長介がいる。「これはまずい！」とその場から逃げ出したら、蘇生した。

・前田忠明（芸能レポーター）

自宅で心筋梗塞症の発作に見舞われ、その際不思議な映像を見たという。遠くに小さな明かりが浮かび、それに向い自分がどんどんと近づき、突如明るい光の世界が開き、なんとも言えない幸福感に包まれたらしい。

・大仁田厚

急性肺炎、急性腎不全、敗血症を併発し危篤状態になったとき、奇妙な映像を見続けていたという。

友人たちとスナックで飲んでおり、裏口の戸を開けると屋形舟が川に浮かんでおり、その舟に乗ると突如場面が変わり、取材としていろんな国を廻った。最後にグリズリーのような熊に殴られて蘇生したと語っている。

格闘技界でも体験者は多くいるようです。

5.自殺者の体験

この世に希望を見出すことができず、人生を終えようと自分で自殺を試みる人たちが後を絶ちません。その中でも、自殺未遂による臨死体験も多く報告されています。

事故や病によって垣間見る世界と少し変わった体験をする人もいます。

俗に言う「地獄」的な光景を垣間見る人が多いようです。

しかし、自殺以外でも経験する人もいとされています。

この「違い」については不明ですが、多くは自殺による「地獄絵」にも共通点があります。

■自殺者による共通点

- ・ 視界がはっきりしているが、そこは真っ暗である（闇が広がっている）
- ・ 得体の知れない恐ろしい怪物のようなものが迫ってくる（追っかけられる）
- ・ 人々の顔がそこらじゅうに広がっている（地に顔を出している）
- ・ 知らない人たちがうつむいていたり、ぶつぶつ何かをつぶやいていたりしている
- ・ 強い孤独感に苛まれる
- ・ 何かに支配されている感覚があり、圧迫感、窮屈感を感じる
- ・ . . .

上記のような経験があるようです。

しかし、中にはその後にトンネルを通り抜け「光に包まれる」ような体験もあるようです。

これらの「区分け」は未だ不明であり、その人に見合ったものが反映されているようです。

実際に体験した人達の報告によれば、国や文化によっても異なるとされており、日本では「三途の川」であったり、

アメリカは「天国と地獄」（キリスト）、インドでは閻魔大王による「帳簿を見て裁く」というような違いがあるとされているのです。

これらのことから、その人がその文化や環境によって体験する事例が本人達の経験や学んできたことによる映像が流れているようにも思えます。

宗教上での意味合いにとれます。

ただ、その中でも共通点があり、同じようなパターンが多く見受けられるのも不思議でしょう。

いづれにしても、死後の世界はあっても不思議ではないと感じます。
なぜなら、死後「無」になるなら、生まれてくる意味さえ問えず、
かつ無になるなら生前に何をしてもよいことになります。

殺人や強盗、あらゆる犯罪から今も逃れている人たちが存在し、
極悪人が死を迎えるまで誰も裁くことができません。
死後もこれらの裁きもなければ、私たちの善行など意味を持たず、
何をしてもよい世の中になってしまうのです。



6.臨死体験を科学

臨死体験を科学的視点で覗くと、様々な研究者が意見を述べているようです。

様々な報告から心停止からよみがえった人の内、4～18%の人が臨死体験をするとされていますが、

臨死体験に対する考え方には2つあり、1つは、臨死体験は酸素が欠乏した脳に起きる生理学的反応であるとする考えで、ミネソタ不眠症センターのマーク・マホワルド氏は次のように言う。

「多くの人は宗教的、超自然現象と説明したが、臨死体験は何等神秘的ではなく科学が説明すべき現象です」

2つ目の考えは臨死体験は脳科学では説明出来ないとし、意識は脳とは無関係に存在すると主張する。

「臨死体験は部分的には神経科学や心理で説明出来るが、説明のつかない未知のメカニズムがあると考えるべきだ」とオークランドの精神科医であるカール・ジャンセン氏は言う。

バージニア大学の精神科医であるブルース・グレイソン氏は、臨死体験をした人の報告、例えば蘇生措置の仕方や看護婦が履いていた靴の色等が正しいかどうかの興味深い報告をしている。

また、ケンタッキー大学の神経生理学のケビン・ネルソン氏は、臨死体験とは瀕死の脳に起きる特殊な睡眠状態ではないかと言う。「これが最終回答とは言わないが、興味深い仮説ではないか。何故なら多くの疑問をこの仮説で説明出来るからだ」とネルソン氏は言う。

心と体は別だとする考えには嘲笑が聞こえてきそうだが、だからこそ真剣に検討しないとならないと反発する人達もいる。臨死体験には本来起きてはならない現象が起きているので、これを説明する新しい理論を考え出す時期に来ているのかも知れない。

フランスのマルティエグ市で開催された世界最初の国際臨死体験医学学会では、8人の医師、研究者グループが声明を発表した。その中で「臨死体験は脳の化学変化で起きている可能性もあるが、単なる幻覚とするにはあまりにも豊で複雑であるから、先入観を除外して研究をすべきである」としている。

心臓が止まると脳に供給される血液は停止し、脳の機能は急激に下がる。

心臓と脳をモニターしている機械は、心臓が停止した後11～20秒以内に脳波の停止を示す。

脳波計は脳の障害を示すものではなく、単に脳が停止しただけだ。

臨死体験を長く研究しているオランダの引退した心臓の専門家であるピム・ヴァン・ロメル氏は

、
コンピューターの電源コードを引き抜いた状態に例えている。
脳の回路は切断され幻覚は起きようも無く、ゼロの状態と言う。

しかしこの脳の電源オフと蘇生の間にも多くの臨死体験が起きる。
「臨死体験を経験した人達は、脳死を目前にして鋭敏な知覚、思考、記憶を戻すようだ。
この現象は一般的科学では説明がつかない」とバージニア大学のグレイソン氏は言う。

沢山の臨死体験報告があるが、その中でも1991年に動脈瘤で脳の手術をしたパム・レイノルズさんのケースは常識を超えている。手術前に彼女の目と耳をテープで塞ぎ、臨死状態で脳波計が脳の最低レベルを記録していたが、それでも手術から回復すると彼女は臨死体験をまざまざと語り、頭蓋骨を切るのこぎりの音までも聞こえたと言っている。

オランダの心臓の専門家であるヴァン・ロメル氏は、臨死体験は科学で説明がつかないと長年考えていた。

しかし1970年代の中頃、アメリカのレイモンド・ムーディーによる「死後の世界」と題する臨死体験本に刺激されて、1988年からオランダの10の病院で心停止から蘇生した344人の人達の調査を開始した。ヴァン・ロメル氏は英国の医学雑誌であるランセット誌に2001年その結果を発表し、調査にあたった18%の人に臨死時の記憶があり、7%に強い臨死体験があったと述べた。

この研究では臨死体験する人としない人の違いを説明出来ず、心理的背景、医療措置、宗教等も指摘出来なかった。もし酸素の欠乏が臨死体験を起すのなら心停止から蘇った人の全てがそれを体験するはずだから、生理学的起きていると言えない。

ヴァン・ロメルは現役を引退して臨死体験専門に研究を始めた。「私は世界中の人に講義をしているし、批判的な質問にも答えている。臨死体験を説明するには、意識と記憶は脳に存在すると言う、従来の科学の概念に疑問を呈する必要がある。

臨死体験が意味するものは、意識とは時間と空間を越えた異次元で経験されると考える。脳とは意識を作り出すものではなくて、脳により意識が知覚されると考える。脳をテレビジョンに例えれば分かりやすい。

テレビは電磁波で運ばれた情報を受信してそれをディスプレイに再現する。

目覚めている時の意識とは脳が意識の一部を読んでいるに過ぎない。

意識が強化された時、我々は臨死体験をするのだろう」と彼は言う。

脳が異次元の状態になり得るの考えに精神科医のジャンセンも同意している。

彼は、臨死体験あるいはそれに似たものが麻酔薬であるケタミンによって引き起こされると本に

書いている。

臨死体験がケタミンで引き起こされるなら、それは幻覚に近いのではと彼は考えた。

しかし今はそう思っていない。「我々が見ている世界は全て自分が感じる世界です。他人が見ている世界と自分が見ている世界が同じであるとは誰も証明できない。

心をオープンにしてあらゆる可能性を受け入れよう」と言う。このジャンセンの考えを受け入れる専門家もいるが、従来の経験と実験を飛び越えるような説明を拒否する人達も多い。

心停止やケタミンの注入以外にも臨死体験に似た状態は引き起こされる。例えば気を失った時、重篤な病気、崖から転落のような危機一髪の際に起きている。

だから、臨死体験とは死や恐ろしい瞬間を否定するような脳の間違った反応ではないかとも考えられる。

更に重要なことは臨死体験は文化によって変化する事である。

間もなく出版されるオーストラリア研究チームの調査によると、中国の臨死体験では、単に体から抜ける体験だけで何等楽しい記憶が無く、日本ではトンネルの代わりに洞窟を見つめるという。メルボルン大学の精神科医であるマヘンドラ・ペレラ氏は臨死体験は幻覚ではないという。何故なら人の最後の経験が文化と言葉と経験に裏打ちされているからだ。

現在の科学は次のように説明するかも知れない。

生存は我々の最も強大な本能であるから、心臓が停止し、酸素の補給が停止すると脳はあらゆる手段で機能を守ろうとする。神経伝達物質はやたら発射されて、側頭部に記憶されているイメージや感情がほとぼしり出る。過去の記憶が蘇る現象は多分脳が危機に瀕して、記憶のファイルを必死にめくっているであろう。

輝く光を見る現象やトンネルは、それぞれ後頭部と側頭部の機能異常から起きているだろう。多幸感や幸福感は危機に瀕した時の坑パニックメカニズムで、神経伝達物質により引き起こされていると。

臨死体験で最も不可解な部分である体から魂が抜け出る経験については、スイスの神経学者であるオラフ・ブランケが2002年に発表している。

癲癇の患者にその側頭頭頂結節点を [電気刺激した所、体から抜け出る体験をした](#)と発表した。

「脳の血液の流れを停止すると、先ず側頭頭頂結節点に変化が起こる。この部分は脳の分水嶺と考えられ、ここに異常が起きると体外離脱感覚と言う幻覚が発生する」とブランケ氏は言う。

臨死体験で本当に魂が天井に上るのかどうかを解明する為に、バージニア大学のグレイソン氏は2004年に次の実験を始めた。突然死の可能性のある患者に除細動器を埋め込み、心停止を試

みた。天井にはノート型パソコンを配置し、そのディスプレイに画像を映しそこまで抜け出た魂だけが見えるようにする。大変独創的ではあったが52人の心停止患者の内、魂が抜け出た経験をした人は誰もいなかった。

「この結果に我々も驚いているが、我々には未だ臨死体験が何もわかっていないのだ。更に研究したいと思う」と氏は言う。

臨死体験の科学で欠落しているのは、臨死体験が何故これほど明瞭に経験されるのかだ。2007年の3月2日に”神経学”誌に発表された2つの研究では、ネルソン氏が率いるケンタッキー大学研究チームが、睡眠状態と臨死体験の近似性を指摘している。ネルソンは脳が危機状態になった時ある種の睡眠障害が起きるのではと考える。ネルソン氏のこの仮説は急激に支持者を集めている。「私はネルソン氏のREM睡眠侵入説が正しいと思う」とミネソタの睡眠専門家であるマホワルド氏も言う。

REM睡眠とは目を激しく動かす睡眠状態で、この時に多くの人は夢を見る。REM睡眠侵入とは一種の障害で、この状態では心は覚醒しても体は睡眠状態で麻痺の状態にある。

「素人は寝るか起きるかの2つだけを考えるが、その中間もあると言う事だ」とネルソン氏は言う。

ネルソン氏は数年前に臨死体験した人からの報告を読んでいて、ある点に注目した。この女性の臨死体験では彼女が手術台に横たわっていて、手術スタッフが彼女の死を宣告するが、彼女は必死に生きてると抗議しようとしたが体が麻痺して言えなかったと言う。

この報告を読んだ瞬間に、ネルソン氏は臨死体験とREM睡眠侵入の関連性に閃いた。

ネルソン氏は55人の臨死体験をした人とそうでない人を選んで、REM睡眠侵入を経験した事があるか無いかを調べた。結果は臨死体験をしたグループでは60%の人がREM睡眠侵入を経験した事があるのに対して、そうでないグループではわずか24%であった。

ネルソン氏は次のように推測する。REM睡眠侵入と臨死体験では脳の覚醒を起すシステムに不具合が生じていて、意識が覚醒と睡眠の中間状態になっている。臨死体験は夢を見ている状態ではなく、REM睡眠メカニズムを経験している状態で、その最中は感情、記憶、イメージが鮮明になっていると。

脳幹は体の最も基本的営みをコントロールする部分で、そこには睡眠と覚醒のスイッチがある。心臓が停止した時に上部にある脳は活動を停止しても脳幹は比較的長く活動している。「脳死は一気に起きるのではなく順繰りに起きるのであろう」とマホワルド氏は言う。臨死体験はこの時に起きる。「臨死体験とは意識は無いが、一部の脳が常軌を逸した活動をしている状態であろう」とネルソンは言う。

ネルソン理論はスピリチュアル派の2人のアメリカの研究者からは酷評されていて、最近発表さ

れた”臨死体験研究誌”の中でジェフェリー・ロングとジャンス・マイナー・ホールデンが「ネルソンが調べた臨死体験では40%がREM睡眠侵入を経験していないのだから、REM睡眠侵入が臨死体験を起しているの説明は疑問ばかりだ」と述べている。

「脳が危機に瀕した時、脳は我々の理解を越えた反応をする」とネルソン氏も言う。しかし彼は更に進めて、一定の条件で臨死体験様の症状を起こす人のREM睡眠状態を今後調べるつもりでいる。

神経学者のブランケは、より沢山の臨死体験をした人の脳のスキャンを取ろうとしている。自然な臨死体験をした人とケタミンを使って臨死体験をした人の比較検討結果も間もなく発表される。「我々は嬉々として研究を進めているが、大いに進歩したのか、そうでないのか誰も分からない」とジャンセンは語る。

結局の所、臨死体験は我々の脳に起きていて、蘇生しなければこの脳の最後のショーは消滅する。脳の中に幽霊がいるわけではないであろうが、脳は我々の理解をはるかに越えて活動している。

7.まとめ

医学でも科学でも実はまだ確たる原因や起こりうる要因については、研究が必要とされています。

体験された人達に関しては、人生が変わった、神の存在を感じたなどと多くの証言がある中、自殺や自害によっても内容が変わって見えるのが不思議ですね。

臨死体験はあくまで「体験」ですが、実際に死後そこにたどり着くのか・・・やはりここが一番の注目されるところではないでしょうか。

私たちは絶対的な「死」から逃れることができません。
生前よりも実は死後のほうが重要な意味があるかもしれません。

俗にいう死後の世界・・・あなたはあると思われませんか。

